



よくわかる四日市萬古焼



読本

土鍋のふるさと四日市

四日市萬古焼とは

現在、紫泥急須や土鍋がその代表とされる「四日市萬古焼」。萬古焼は、江戸時代元文年間(1736~1740)に桑名の商人沼波弄山が茶の趣味が高じて、現在の三重郡朝日町小向に窯を築き自分で茶器を焼き始めたのが始まりとされています。その作品に変わらぬに永遠に残っていくようにとの意味から、「萬古」または「萬古不易」の印を押したのが名前のいわれと言われています。「萬古の印があることがいちばんの特徴」と言われるほど形は多彩。現在では、四日市市と菰野町を中心に窯元数は100社以上にのぼります。

土鍋は萬古焼を代表する商品です。生産高は国内の約80%を占めています。街中で見られる国産土鍋のほとんどが、萬古焼と言っても過言ではないでしょう。近年は、大きさや形状も様々に増え、品目を挙げれば、陶板、タジン鍋、ごはん鍋、炭コンロなど、多彩な商品が開発されています。特に高度な技術を使った電磁調理器用のIH対応土鍋の開発も盛んです。

萬古焼土鍋の大きな特徴はその陶土にあります。耐熱性に特に優れガスレンジや炭火などの空焚きや直火に対しても、高度の耐久性を発揮します。それは陶土原料に含まれるリチウム鉱石の働きによるもので、この鉱石が陶土中に40~50%含有されているために直火にかけたり空焚きに対しても十二分に耐える商品が開発できるのです。

急須もまた、土鍋と並び萬古焼を代表する商品の一つです。使えば使うほどに味わいと光沢を増すとされています。特に昭和54年に通商産業大臣(現在の経済産業大臣)指定の伝統的工芸品に指定された萬古焼のシンボルは紫泥の急須です。鉄分を含む地元の粘土を使用し還元焼成を行い、釉薬をかけない焼き締まった紫褐色は緑茶によくマッチします。生産量全国3位を誇る地元の伊勢茶と萬古焼急須との取り合わせは、まさに“あ・うん”の呼吸です。

萬古焼の食器は、明治末期(1911年頃)に水谷寅次郎が半磁器の製造技術を開発し、「大正焼」として売り出し、近代産業として発展させました。半磁器とは陶器と磁器の中間的な性質を持ち、磁器の硬質さと陶器の柔らかさを兼ね備えた焼き物です。陶器より強度が増し、大きな成形に適しており、下絵付けの発色が良いのが特徴です。半磁器の出現により萬古焼の生産は飛躍的に伸び、四日市港からの輸出も拡大し、全国有数の陶磁器産地として育ってきました。現在では、ライフスタイルに合った機能性のある様々なデザインのテーブルウェアを提案し、日本全国はもちろん海外にもその市場を広げています。平成21年には、「四日市萬古焼」は地域団体商標に登録されました。



三重県北部に位置し、県下最大の商・工業都市。一時は公害地の代名詞のようでしたが、行政と企業の努力によって美しい空を取り戻しています。コンビナート、四日市萬古焼の他、伊勢茶も全国有数の産地として知られています。

第1章 これが四日市萬古焼

土鍋のふるさと四日市

四日市萬古焼とは ②

第2章 四日市萬古焼ができるまで

原料 製土 成形 ③

加飾 施釉 焼成 検査 ④

第3章 土鍋・耐熱陶器

土鍋・耐熱陶器／歴史と開発 特徴 品質 製造方法 ⑤ ⑥

土鍋・耐熱陶器の種類 ⑦ 土鍋のうまい使い方 ⑧

耐熱陶器でおいしく調理する ⑨ ⑩

第4章 急須

急須／歴史と開発 伝統的工芸品の指定 特徴

急須の虹彩色について 紫泥急須と朱泥急須の焼成方法 ⑪

急須の製造方法 ⑫

急須の種類と味わい方 急須図鑑 ⑬ ⑭

第5章 食器

食器／歴史 特徴 品質 使い方・注意点 ⑮

食器の種類 食器の製造方法 ⑯

第6章 花器・工芸・植木鉢・その他インテリア

花器／歴史 特徴 ⑰

工芸／特徴 植木鉢／歴史 特徴

その他インテリア／歴史 特徴 ⑱

第7章 PR活動

CHALLENGE

PR活動／広める ⑲ ⑳

第8章 Q&A

Q&A／土鍋関連 急須関連 食器関連 その他 ㉑

主な陶磁器分類表 ㉒

第9章 四日市萬古焼の歴史

萬古焼のはじまり—創始者・沼波弄山 ㉓

萬古焼の復興—森有節・千秋兄弟登場 ㉔

四日市萬古焼の誕生—山中忠左衛門とその発展 ㉕

大正焼の誕生から現代へ ㉖

第10章 インタビュー

長老たちに聞く四日市萬古焼エピソード

時代を語る。後継者たちへのメッセージ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚

CONTENTS

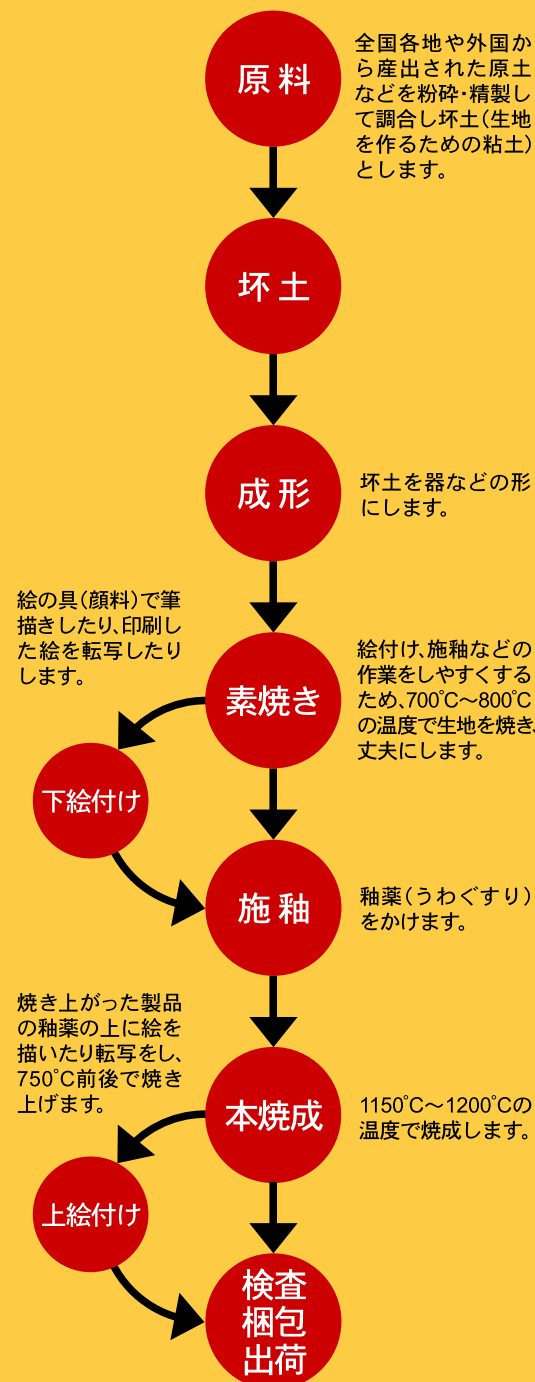
※本誌では、本文中「四日市萬古焼」を「萬古焼」と略称しております。

四日市萬古焼 ができるまで

明治時代に地場産業として大きく発展した萬古焼は、品質の高い製品を効率的で安価に生産するために、分業制が発達してきました。

今もメーカーや問屋はもとより、原料・坯土メーカー、型(石膏)屋、生地屋、釉薬屋、上絵屋など様々な専門業者の手を経て、萬古焼の製品は作られています。

基本的なやきものの製造工程



原料

萬古焼の主な原料は、粘土、長石、陶石などです。

粘土	木節粘土、蛙目粘土、せつ器粘土
長石	アプライト質長石、風化長石、ペタライト(長石の一種)など
陶石	セリサイト質、ロウ石質及びカオリン質陶石

製土

各原料は、ボールミルなどによる粉碎、篩による分級を行います。必要に応じて水と混ぜ、沈降分離させることによる水簸分級が行われます。このようにして一定範囲の粒度、化学組成を有する原料が精製されます。これらの原料を水とともに所定の割合に混合し、フィルタープレスによる脱水後、混練して各種坯土が作製されます。

萬古焼の代表的な坯土は以下のとおりです。

坯土名	原料名	代表的な配合割合(%)	原料の主な産地
半磁器土	粘土	40	愛知県、岐阜県、三重県
	陶石	50	石川県、岡山県
	長石	10	滋賀県
赤萬古土(急須土)	黄土(せつ器粘土)	50	愛知県、岐阜県
	山土(せつ器粘土)	20	三重県
	含鉄木節(せつ器粘土)	30	愛知県
土鍋耐熱土	粘土	40	愛知県、岐阜県、三重県
	ペタライト	40～50	ジンバブエ、ブラジル
	陶石	20～10	山形県、岡山県



水簸粘土



ボールミル



混練

成形

現在は、石膏型を使用する機械(動力)ロクロ成形、鑄込み成形が主ですが、伝統的なロクロによる手引き成形や板状にした土を用いて作るタタラ成形もあります。

●機械(動力)ロクロ成形



①ローラマシン成形
加熱された回転式の金属ゴテを用い、石膏型に練土を押しつけて成形する方式。



②水ゴテ成形
板状のコテと水を用い、回転する石膏型に練土を押しつけて成形する方式。

●鑄込み成形

坯土に水と分散剤を混ぜて泥状にしたもの(泥漿、スラリー)を石膏型に流し込み、石膏型による水分の吸収を利用して成形する方式。



①排泥鑄込み成形(ガバ鑄込み)
石膏型に泥漿を流し入れ、石膏型に必要な厚みが着肉した後に余った泥漿を流し出す方式。主に袋状の製品を成形します。



②圧力鑄込み成形(あっさく)
石膏型の中に圧力を加えた泥漿を充填して固める方式。

【石膏型について】

石膏型に用いる石膏は、アフリカ北部、中近東などで産出する石膏(二水石膏)を加熱処理して焼石膏(半水石膏)にしたものが使用されます。半水石膏は水と混ぜると反応して二水石膏になり、このときに固まる性質があります。固まった石膏は1ミクロン前後の細かい空隙が多数存在し、毛細管現象により吸水性を生じます。石膏型は焼石膏の粉に適量の水を混ぜてスラリー状にし、型に流し込んで固化させ、所定の形状にしたもので、その高い吸水性を利用して、量産陶磁器製品の成形時に用いられています。

加飾

陶磁器の美観を高めるために下絵付け、上絵付け、化粧掛け(粉引き)、彫り(※P12参照)などの装飾が行われます。



●下絵付け

素焼体に着色剤としての金属酸化物や顔料を含む陶磁器用下絵具で絵を描き、釉薬をかけて焼成する方法です。量産する際には、下絵具で絵柄を印刷した薄紙を貼り付けて、水を含ませたスポンジで押さえて絵柄を移す銅版(シルク)転写法、下絵具を直接印刷するスクリーン印刷法などもあります。



●上絵付け

本焼成した陶磁器の表面に陶磁器用上絵具で絵を描き、700℃～850℃程度の低温で焼き付ける方法です。量産する際には、上絵具で絵柄を印刷したフィルムを貼り付けて、水を含ませたスポンジで押さえて絵柄を移す銅版(シルク)転写法、下絵具を直接印刷するスクリーン転写法などもあります。また、萬古焼には伝統的で独特な盛絵という方法があり、乳濁色の上絵具を何度も盛り上げて筆描きします。



●化粧掛け

生薬地または素焼体にスラリー状にした別の組成の土(化粧土)を掛けたり、刷毛で塗ったり(刷毛目)した後に、釉薬を掛けて焼成する方法です。白化粧土が主流ですが、赤化粧土や顔料を添加した色化粧土もあります。急須の“チャラ掛け”と言われる方法は、化粧土と釉薬の中間的な組成の溶融化粧土です。

施釉(釉掛け)

釉薬は、多くの種類がありますが、釉薬の焼成性状により、透明釉、乳濁釉、マット釉、結晶釉に区別されます。

透明釉	乳濁釉	マット釉	結晶釉
表面光沢のある透明な釉です。	表面光沢はありますが釉の内部が濁って不透明になった釉です。	表面に微細な結晶が析出し、つや消し状態になった釉です。	釉の表面や内部に粗大な結晶が析出し、結晶の種類に特有の模様を形成した釉です。

萬古焼で用いられている釉薬は、一般に、長石、石灰石、亜鉛華、炭酸ストロンチウム、珪石、粘土などに必要に応じて着色剤としての金属酸化物、顔料、低温溶剤としてのフリットを所定の割合で調合したものです。耐熱陶器用の釉薬として、ペタライトを多く用いたものもあります。この調合物に所定量の水を加え、ボールミルにより粉碎、混合してスラリー状にしたものを釉薬として用いています。釉薬は手や専用のハサミで“ずび掛け(浸し掛け)”したり、スプレーガンを使って“吹き付け(ピース吹き)”して掛けます。

焼成

焼成は、主にブタンガスを燃料としたシャトル窯、トンネル窯で行います。電気炉による焼成を行うこともあります。また、素焼きは専用の両横扉の窯で行っています。



●シャトル窯

台車に製品を詰めて窯内に挿入して焼成し、焼成後、台車を引き出して製品を取り出す方式。



●トンネル窯

トンネル状になった窯の内部に製品を詰めた台車を連続して挿入し、移動させながら焼成する方式。

焼成雰囲気は、酸素の存在する状態で酸化焼成と、酸素がなく一酸化炭素が存在する状態で還元焼成があります。萬古焼では、従来、半磁器、耐熱陶器で酸化焼成が主でしたが、紫泥急須などでは強還元焼成が行われています。焼成温度は、1150℃～1200℃程度、ゼーゲルコーンSK6～7が多いです。

検査

耐熱試験、耐酸試験などで安全性を管理しています。(※P6参照)

四日市萬古焼ができるまで

土鍋・耐熱陶器



耐熱陶器ブランド「四日市萬古焼」。
世界初「割れない土鍋」として開発50年の実績。国産シェア約80%。

歴史と開発

従来、土鍋は蛙目粘土単味またはシャモット混入の陶土で作られていましたが、熱源の進化と共にさらに耐熱性や強度を高めた土鍋の開発が望まれていました。

昭和34年(1959)頃、萬古焼の一部メーカーが耐熱陶土の研究に着手し、ペタライトを陶土に40~50%配合した低熱膨張性耐熱陶土の開発に成功しました。

一般に物質は、熱すると膨張します。陶磁器を加熱した場合、全体が均一に温度が上がらないため、その膨張差により割れたり、ひびが入ったりします。ところが、低熱膨張性耐熱陶土を用いた萬古焼の土鍋・耐熱陶器は加熱してもほとんど膨張しないため、これらの欠点が起こりにくくなっています。

ペタライト入りの土鍋は「割れない土鍋」ということで全国に広まり、昭和40年頃には萬古焼の土鍋は全国シェアの大半を占めるようになりました。その後もペタライト入りの土鍋は発展を続け、萬古焼を代表する商品になりました。当初、圧力鋳込み成形による浅型の土鍋が主流でした。その後大量生産が可能なローラーマシン成形の土鍋が主流となりました。

また、古来の三島柄を取り入れた土鍋は、「みしま」とよばれ、たくさんの人に使用され土鍋の代名詞のようになりました。一方で水ゴテ成形により、手作り感のある土鍋も作られ、多種多様な土鍋が生産されるようになり最盛期には、四日市で年間800万個が生産されました。耐熱釉薬の研究も同時に行われ、三重県窯業試験場(現・三重県工業研究所窯業研究室)の指導協力により、低熱膨張性のマット釉を基礎として、様々な色の釉薬が開発されました。

最近では、耐熱陶土を利用した様々な商品が開発されています。水コンロ、焼きいも鍋、陶板、タジン鍋、蒸し鍋、煎じ土瓶などです。また、遠赤外線放射率を高めた商品や、IH調理器に対応した商品も次々と開発が進んでいます。

この50年間の研究・開発により、現在でも国内土鍋生産の約80%のシェアを占めています。



ペタライトの原石
(ジンバブエ産)

■ペタライトについて

化学成分: $\text{Li}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 8\text{SiO}_2$
主な産出国: ジンバブエ、ブラジル
特性: 1000℃以上で焼くと、原子の並び方が全く変化しβ-スポジューメン固溶体とよばれる結晶に変化します。このスポジューメンの熱膨張がとても低いので、ペタライトを40~50%配合した坯土で成形した生地を1150~1200℃以上で焼くと、熱膨張の低い、つまり耐熱性の高い土鍋になります。

特徴

- 約50年前に萬古焼で開発された「割れない土鍋」は、国内生産の約80%を占めています。
- 土鍋は、水炊きやちゃんこ鍋などの鍋ものに使用されるのももちろんのこと、おでんやポトフなどの煮込み料理や陶板のように炒めたり、焼いたりすることもできます。
- グラタン、ドリアなどのオープン料理、レンジの蒸し料理、温めなどにも使えます。
- ステンレス板方式、銀転写方式などの様々な種類のIH調理器対応の土鍋があります。

遠赤外線効果

陶磁器を熱すると遠赤外線が放出されます。遠赤外線により効率的な調理ができます。

土鍋料理がおいしいワケ

素材の旨味を引き出す遠赤外線効果

遠赤外線とは目に見える光(波長:0.4~0.8μm(ミクロン)よりももっと長い、目に見えない3μm~1000μmの波長を持った光です。私たちの身の回りにある多くの物質は、その中の2.5μm~30μmの波長域の遠赤外線をよく吸収することが知られています。そのため、遠赤外線が食物などにあたると、その表面(約0.2mmまでの深さ)で吸収され、食材が効率よく温められます。萬古焼で多く作られている陶器製の土鍋は、アルミ、銅、ステンレスなどの金属製調理器具に比べて3~4倍以上の遠赤外線が放出されることが確認されています。そのため、食材を効率よく温めることができるのです。

蓄熱性

土鍋のような陶器は、比熱が大きく、鉄の約2倍です。比熱は「1gの物質の温度を1℃上げるのに必要な熱量」のことで、この値が大きいほど、一度温めると冷めにくいことから、蓄熱性が高いということになります。従って、土鍋には高い蓄熱性があり、加熱調理したものが冷めにくいという利点があります。

保湿性

土鍋などの耐熱陶器は、一般に吸水率10%程度を有する多孔質体であり、調理時に水や水蒸気が素地に入り込み、ある程度保持されます。このため、調理したものが乾燥するのを防ぐ効果があり、この性質を利用した飯びつ、パンや野菜の保存容器などが開発されています。

そのまま食卓へ

土鍋や耐熱陶器は、皆が集う賑やかな食卓の中心にある鍋料理で使って頂くには最適な加熱調理道具です。陶器のあたたかみのある質感や絵柄は、食卓を和ませ、おいしさとともに目も楽しませてくれます。また、ごはん鍋やおでん鍋、ラーメン鉢などはキッチンで調理後にそのまま食卓へ置いていただいても違和感がなく、保温効果もあります。

品質

●耐熱性及び安全性

1.耐熱性(熱衝撃強さ)
萬古焼の土鍋・耐熱陶器の耐熱性は、直火に使用する卓上・厨房用の陶磁器製耐熱陶器に関する規格(JIS S2400:2000)のうち、最も厳しい基準値である「直火(高耐熱)350℃以上」に適合しています。さらに、萬古焼では耐熱温度差500℃以上の耐熱試験も行い、耐熱性の強化を追求しています。耐熱温度差の規格は以下のとおりです。

種類	熱衝撃の強さ
直火用(高耐熱)	350℃以上 適合
直火用	150℃以上
天火用(300℃以下)	150℃以上
天火用(200℃以下)	120℃以上

※試験方法:試験温度差になるように加熱した恒温器の中に試料を1時間保持した後に、24±3℃の水槽中に投入して冷却後、素地及び釉薬の割れ・切れ・ヒビなどの欠点の有無を確認する。

2.安全性(有害物質の溶出量)

萬古焼は、食品衛生法(平成20年厚生労働省告示416号)に基づく溶出基準により管理されています。また、土鍋・耐熱陶器はさらに厳しい萬古焼基準(食品衛生法の1/5)を設けています。有害物質(鉛・カドミウム)の溶出量に関する基準値は以下のとおりです。

	鉛	カドミウム
食品衛生法基準 (陶磁器製の加熱調理用器具)	0.5μg/mL	0.05μg/mL
萬古焼基準 (土鍋・耐熱製品)	0.1μg/mL	0.01μg/mL

※試験方法:容器に4%酢酸溶液を満たし24時間室温で放置する。この溶液を原子吸光分光光度計により分析する。



●お客様の安心・安全のために
「四日市萬古焼」の自主基準値をクリアした商品には左記のマークを貼ります。このマークの商品は、安心・安全をお届けする「信頼の証」です。

開発当時の
ロングセラー製品



煎じ土瓶



土鍋

土鍋・耐熱陶器の製造方法

■耐熱陶土



主な調合は、ペタライト40~50%、木節粘土+蛙目粘土45~50%、カオリン(主に河東カオリン(白))又は蛭石(A1₂O₃含有量15%前後のもの)10~15%。シャモットを5~7%添加することもあります。

杯土 No	代表的な調合例			
	ペタライト	カオリン又はロウ石	可塑性粘土(木節・蛙目)	シャモット・石英等粗粒物
①	50	10	40	0
②	40	15	40	5

①きめの細かい坯土
②粗い粒子のシャモットを含んだ、きめの粗い坯土

■釉薬



土鍋の熱膨張が非常に小さいため、使う釉薬もそれに合うよう小さくします。土鍋は釉薬に貫入があると水漏れを起こす場合がありますので、少なくとも使い始めは無貫入であることが好ましいです。そのため、釉薬は基本的にペタライトを多量に使うマット釉になります。

代表的な調合例			
ペタライト	60~75	炭酸ストロンチウム	4~12
釜戸長石	0~15	焼タルク	0~5
鼠石灰	0~5	蛙目粘土	5~10
亜鉛華	8~16		

■成形方法



●ローラーマシン成形

加熱された回転式の金属ゴテを用い、石膏型に練土を押しつけて成形する方式。

●水ゴテ成形

板状のコテと水を用い、回転する石膏型に練土を押しつけて成形する方式。



●圧力鋳込み成形(あっさく)

石膏型の中に圧力を加えた泥漿を充填して固める方式。



●排泥鋳込み成形(ガバ鋳込み)

石膏型に泥漿を流し入れ、石膏型に必要な厚みが着肉した後に余った泥漿を流し出す方式。主に袋状の製品を成形します。

■焼成方法



土鍋の多くはトンネル窯により1180℃前後で連続的に酸化焼成され、大量生産されています。また、シャトル窯では酸化焼成もしくは還元焼成により、多品種の製品が生産されています。

土鍋・耐熱陶器の種類

萬古焼の土鍋・耐熱陶器には、陶板、ごはん鍋、蒸し鍋、水コンロ、タジン鍋、耐熱土瓶など、いろいろな料理に適した様々な種類があります。また、すべての商品が、直火、オープン、電子レンジでの使用が可能です。最近では、IH（電磁調理器）の加熱方法に対応した土鍋もあります。



土鍋



ごはん鍋



陶板



水コンロ



蒸し鍋



タジン鍋



煎じ土瓶



IHごはん鍋



ラーメン鉢



焼肉プレート



多機能鍋



パン焼き器



煮込み鍋



ビビンバ鍋



焼きいも鍋

IH土鍋の使い方

IHと直火の違い

電磁調理器は、非常に高効率の調理加熱方法です。従来の加熱(直火・炭・ラジエントヒーターなど)は鍋を輻射熱により加熱する、間接的な調理方法になります。しかし、電磁調理器は、鍋の底部分(発熱体)だけが急速に発熱する、直接的な調理方法になります。

IH調理の注意点

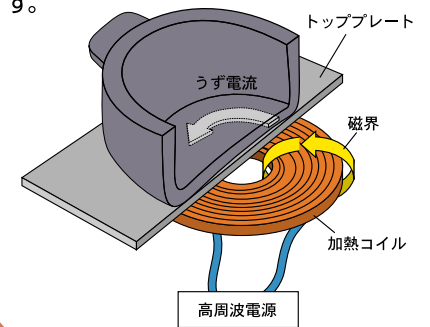
- 焦げ付き、空焚きなどは鍋が破損する場合があるので、火力及び具材のかき回しなど注意してください。
- 調理の際に、電磁調理器上で引きずったり、衝撃を与える様な置き方をしないでください。電磁調理器のトッププレートが破損します。



IH土鍋について

IHの原理

IHは誘導加熱(Induction Heating)とよばれる加熱方式です。加熱に用いる機器は「電磁調理器」という名称で、業務用、家庭用に広く普及しつつあります。この加熱方式は、電磁調理器に内蔵されたコイルに高周波電流を流すことにより発生した磁界が電磁調理器上に置かれたIH土鍋に作用すると、渦電流とよばれる電流が鍋の底面に流れ、このときの電気抵抗により発熱する原理を利用したものです。



IH用発熱体

IHの発熱体は、一定レベルの導電性を持った物質で電磁調理器のコイルの寸法に適合する大きさのもの(一般には直径15cm程度の円板)である必要があります。土鍋は絶縁体であるため、そのままでは発熱しません。そこで、厚さ50ミクロン程度の銀やアルミニウムなどの薄膜、厚さ0.5mm程度のステンレス板、厚さ数mmのカーボン板などが発熱体として用いられています。

IH土鍋の構造と種類

一般にIH土鍋は、各種発熱体を土鍋の底面外側または内側に装着した構造になっています。銀の薄膜は転写紙により土鍋の底面に貼り付け、低温で焼成して焼き付けたものです。アルミニウムやニッケル合金などを土鍋の底面へ溶射し、薄膜状にしたものもあります。また、カーボン板を土鍋の底面外側に接着剤で貼り付けたものや土鍋の底面をくり抜き、そこへカーボン板をはめ込んで接着剤で固定したものもあります。最近はステンレス板を土鍋の内側へ物理的に固定するなどして装着するタイプが多くなっています。

土鍋・耐熱陶器

土鍋の うまい 使い方

初めて使う時は

- 目止めの目的・方法
土鍋は陶器質のため、吸水性があります。この特性は、土鍋を火にかけても割れないようにするために必要ですが、水漏れや臭い、カビなどの原因にもなります。これらの問題を予防するには、使い初めに次のような処理をしてください。
- 米のとぎ汁や小麦粉(大さじ1~2)を入れた水を弱~中火でひと煮立ちさせた後、冷めるまでそのまま放置します。その後、よく洗ってから使用してください。

使用の際は

- 濡れたまま火にかけないでください。
- 鍋を天ぷら・フライなどの揚げ物の調理に使用しないでください。
- 土鍋の中に、ご飯や料理を長時間入れたままにしないでください。臭いやカビの原因になります。
- 調理中は大変熱くなりますので直接鍋に触れないでください。テーブルに置く際は、鍋敷きをご利用ください。
- その他、製品ごとの特性もあるので製品付属の取扱説明書を参考にしてください。

使い終わったら

- 使用後の洗い方・保管方法
- つけ置き洗いはやめてください。洗剤で洗ってもかまいませんが、よく洗剤を洗い流してください。
- 洗浄後は、風通しのよいところで十分乾燥させてから、収納してください。乾燥が不十分の場合はカビなどの原因になります。
- 土鍋の焦げ付きは、土鍋にお湯(または重曹を加える)を沸騰させて、焦げがふやけて浮いてきたらスポンジで洗います。
- 臭いがついてしまったら、洗った後、土鍋にお湯と酢(または、レモン汁、茶殻)を混ぜ、一晩置き、水洗いしてから自然乾燥させます。

蒸

蒸し土鍋は素材の旨味を引き出す

野菜、肉類、魚貝類などを蒸すことにより、素材本来の旨味が楽しめます。また余分な脂肪がとれ、ヘルシーな料理としても大変親しまれています。一般的な鍋料理にも使え、レシピのアイデアがさらに広がります。土鍋の蒸し鍋、タジン鍋は、素材にじっくり熱を通して旨味をまるごと閉じ込めて保温効果も抜群。食卓に鍋をのせれば、それだけで特別なご馳走に。



国内初のタジン鍋は四日市萬古焼から

モロッコのタジン鍋を最初に国内でデザイン企画開発し、量産したのは萬古焼です。タジン鍋で作る料理が土鍋料理と違う最大の特徴は、土鍋料理は、水を沸騰させて、食材を入れて調理しますが、タジン鍋料理は、食材に含まれる水分を使い、循環させて蒸し焼きにするので調理そのものが簡単にできます。カキのどて焼きも煮込まないので、縮んで固くなることなく非常に美味しく蒸しあがります。

土鍋で炊くご飯はうまい！

土鍋の鍋底全体をガスの炎が包み込み、強火でもゆっくり火を通すので、「はじめチョロチョロ、なかパッパ」(お釜でおいしく炊く言い伝え)が自然にできます。遠赤外線効果で芯までふっくらつつやのご飯が短時間で炊けておこげもできます。土鍋はかたすぎずやわらかすぎず、米の一粒一粒が立ったおいしいご飯ができるのです。また、土鍋の保温性で、余熱がふっくら上手に蒸らしてくれます。

炊

おいしいご飯の炊き方

※炊き方は製品によって異なりますので、付属の取扱説明書をご覧ください。

【ごはん鍋の使い方：一例】

- ① 三合(540cc)のお米を研いで、約600ccの水に20分間つけておきます。水の量は、お米の割増を目安に、お好みにより調整してください。
- ② 中火よりやや強めの火にかけて約15分ほど炊きます。9～12分ほどで沸騰してきます。湯気が勢よく出始めてから弱火で約3分で火を止めるのが目安です。この時1～2分で炊き上げの時間を伸ばすと香ばしいおこげができます。(白米以外のものが入る場合は、湯気が出始めてから弱火にし5～7分ほど炊くとおいしく炊けます。)
- ③ 火を止めてそのまま10～20分ほど蒸らします。この蒸らしの時間が大切なので、蓋を開けないようにしてください。その後、蓋を開けて余分な水蒸気をとばし、ご飯をよくほぐします。

分量・時間の目安

お米	1合(180cc)	2合(360cc)	3合(540cc)
水	200cc	400cc	600cc
炊き時間	11分	13分	15分



耐熱陶器でおいしく調理する

温

陶器でふっくらあたためる

●炊いて余ったご飯は
飯びつに入れて冷蔵庫または冷凍保管します。召し上がる際は飯びつのまま電子レンジで温めると、できたてと変わらないおいしいご飯ができます。また、無数の細かい気孔で呼吸する陶器は水分を調整し、ご飯が黄ばみにくく、べたつかず保存できます。いやな臭いも吸着。乾燥を防ぎ、鮮度を保持するのでカット野菜や果物、きざみネギなどの保存容器にもなります。



土鍋・耐熱陶器

煎

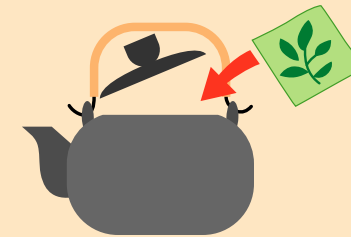
薬草を煎じるなら耐熱土瓶

耐熱土瓶は直接火にかけられ、漢方薬や薬草、健康茶などを煎じることができます。古来より中国では、「薬草を煎じるのは土の鍋に限る」と語り継がれ、漢方薬だけでなく、お粥やスープなどの薬膳料理を作る際にも土鍋や土瓶が使われ続けています。



煎じ土瓶の使い方(薬草の煎じ方)

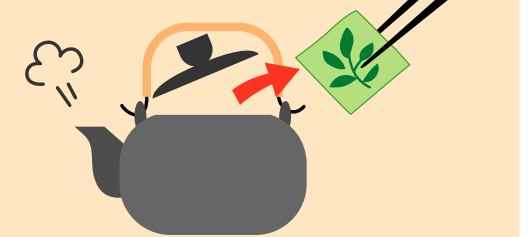
薬草をティーバックに入れて煎じると便利です。薬草のまま使用する際は、火を止めてからすぐに茶こしやガーゼなどで漉します。薬草を土瓶に入れたままにしておくと、煎じカスが有効成分を吸ってしまうので煎じたらすぐに取り出してください。



① 水と薬草を煎じ土瓶へ入れます。



② 薬草に合わせて弱火で煎じます。



③ 熱いうちに薬草を土瓶から取り出します。

煮

土鍋で煮物上手

土鍋で煮物を作る時は、弱火でゆっくり煮ます。ある程度煮えたら、余熱を利用してそのまま置けば、おいしい煮物のできあがり。野菜が煮崩れせずに具材にじっくり味が染み込みます。遠赤外線効果で肉や魚がやわらかく仕上がります。



土鍋料理をみんなで囲んでもっとおいしく！

土鍋は、金属鍋と比べると非常に多くの遠赤外線を出しています。これにより、食材の中心部に早く熱が伝わり、おいしく煮ることができます。土鍋料理は、たくさんの野菜を食べることができ、生野菜では吸収しにくい栄養分も、加熱調理により摂取することができます。また、土鍋料理の最後のシメであるごはん・麺類などで、だし汁に食材から染み出した栄養分を余すことなく食べることができます。家族・仲間と土鍋料理を囲んでお楽しみください。

焼

アツアツ陶板鍋をそのまま食卓に

調理器具と食器の機能を備えて、焼く、炒める、炊く、煮る、温めるなどが直火で調理できそのまま食卓へ。陶板鍋は、土鍋の特性である蓄熱性と熱の伝わり方により素材の中までしっかりと火が通り本来の風味を引き出します。キッチンから食卓へ盛り直す必要がなくてできたてのおいしさをテーブルへ……。やきものの器で食べる料理は、アツアツで見た目もおいしい。心もホッと楽しいひとときを。

陶板鍋の料理あれこれ

- 焼肉・ステーキ/食卓で焼きながらアツアツを。
- リゾット/米や野菜、豆などを炒めてから、スープを入れて煮込んで。
- パスタ料理/陶板であらかじめ具材を炒めたり、ソースを煮込んでおき、茹でたてのパスタを混ぜ合わせたらそのまま食卓へ。
- 韓国料理/陶板焼ビビンバやブルコギを。



急須

歴史と開発

萬古焼の始まりとされる古萬古の作品には、現在の萬古焼急須の原点ともいえる、赤絵を施した盛蓋瓶せいさいびんが少なからず残されています。

江戸時代後期から明治時代にかけては、森有節もりゆうせつを始めとする陶工の手により、木型を使った急須や土瓶などが作られ、煎茶の普及とともに好評を博しました。四日市市たるさかやまの垂坂山で出土されたきめの細かな白い陶土は木型成形に適していて、様々なデザインの急須や土瓶が作られました。当時の流通の発達に伴い、国内はもとより、四日市港から海外にも輸出されました。

明治時代の中頃には、そのきめの細かな白い陶土も枯渇し、それに変わって現在の紫泥につながる、鉄分を多く含んだ赤土を利用した急須作りが広がっていきました。

大正、昭和には、煎茶を飲むという喫茶の大衆化も進み、多くの陶工が紫泥を中心に様々な手法をこらした急須をロクロを使って量産しました。また、萬古焼急須の特徴である、“水切れのよさ”や“茶こしの穴の細かさ”などをセールスポイントとして全国に販売されました。

戦後、手作りの急須ばかりではなく、機械ロクロ成形や鑄込み成形による量産を目指した急須の生産が盛んになりました。また、緑茶の製法の変化から、茶こしが目詰まりしない急須のニーズが生まれ、ステンレスの茶こしを備え付けたものが普及品として多くなりました。

昭和54年には、200年以上継続している工芸品として、国の伝統的工芸品の指定を受け、平成の時代においても“急須は四日市萬古焼”と評され、今に至っています。

伝統的工芸品の指定

昭和54年1月12日に四日市萬古焼は、通商産業大臣から伝統的工芸品として指定されました。その主な指定内容は、以下のとおりです。

【工芸品名】四日市萬古焼
(よっかいちばんこやき)

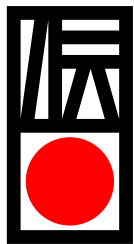
【主な製品】急須、茶器、花器、酒器、室内置物

【主要製造地域】四日市市、三重郡菟野町ほか

【技術・技法】

- ① 成形は、ロクロ成形、押型成形又は手捻り成形によること。
- ② 素地の模様付けをする場合には、透かし紋、びり、千筋など14種類によること。
- ③ 釉掛けをする場合には、浸し掛け又は流し掛けによること。
- ④ 上絵付けをする場合には、盛り上げ、ぼかし、たたきなど7種類によること。

【原材料】坏土に使用する陶土又は陶石は、知多黄土、垂坂黄土、垂坂青土など7種類又はこれらと同等の材質を有するものとする。



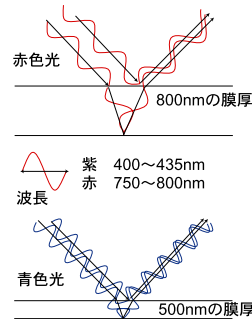
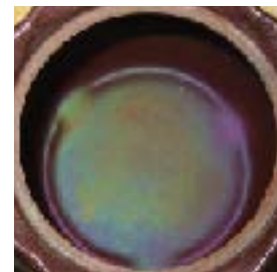
特徴

- 萬古焼の代表である紫泥の急須は、自然の鉄分を多く含む粘土で還元で焼かれて紫褐色になります。
- 萬古急須(紫泥)はお茶の渋味成分を程よく吸着し、旨味成分を活かします。緑茶には最高の器です。「三重県工業研究所窯業研究室」の科学的分析による試験結果です。
- 焼き締めの萬古急須は使うほどに色艶が出て光沢が増してきます。
- 型萬古は明治時代に萬古焼の発展に大きくかかわった製法です。萬古焼独自の技法で、木型が細かく分解できるようになっています。2~3mmの薄い板状の粘土を木型の上に張り付けて急須を作った後に、木型を分解して抜いていく方法です。現在では、ロクロが中心となり生産が少なくなりました。

急須の虹彩色について

萬古急須をしばらく使っていると写真のような虹彩色が現れることがあります。これは、表面に一定の条件で茶渋のごく薄い膜が形成されたことに起因します。急須の表面に、茶渋などで図に示すような光の波長と同じ400~800nm(nm;ナノメートル=1mmの百万分の一)の薄い膜が形成され、膜の表面と膜の底面で反射される光の干渉により、膜厚に応じて特定の光が強められるためです。形成される膜が場所により不均一なため、7色の虹のような反射光が現れます(しゃぼん玉や油膜が虹色に発色するのと同じ原理です)。

素地表面が朱泥や磁器のような白色であれば、膜の底面を透過し素地表面で反射される光が同時に観測されるので、虹色にはなりません。紫泥急須のような濃い色や黒色の素地では、素地底面を透過した光が吸収され、光の干渉現象のみが観測されるため、虹色の発色が目立つようになります。急須をさらに使い込めば、膜が厚くなることにより目立たなくなります。急須に現れた虹彩色は、市販の食器用漂白剤で洗浄可能ですが、これは、愛情を込めて急須を長く使い込んだごほうびです。無害ですから安心してご利用ください。



紫泥急須と朱泥急須の焼成方法

紫泥急須しゅいでいと朱泥急須は、同じ鉄分を多く含む土で作りますが焼き方は異なります。紫泥急須は、窯内の酸素をなくして燃焼させる「還元焼成」で、急須は鉄の酸素が奪われるために紫褐色になります。朱泥急須は、窯の中に十分な酸素を送り完全燃焼させる「酸化焼成」で、急須の鉄に酸素が十分に結合して朱色になります。同じ陶土でも焼成方法の違いで全く違う色調になります。

急須の製造方法

■成形方法



●ロクロ手引き成形
ロクロの上で、一品一品、手で引き上げて形を作ります。



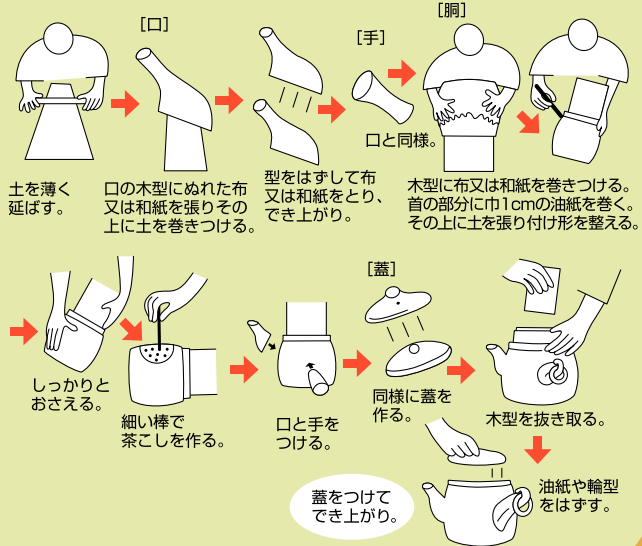
●水ゴテ成形
板状のコテと水を用い、回転する石膏型に練土を押しつけて成形する方式。

●排泥鑄込み成形(ガバ鑄込み)
石膏型に泥漿を流し入れ、石膏型に必要な厚みが着肉した後に余った泥漿を流し出す方式。主に袋状の製品を成形します。

●圧力鑄込み成形(あっさく)
石膏型の中に圧力を加えた泥漿を充填して固める方式。

●木型による成形(型萬古)
木型を用いた製法で森有節が考案したといわれています。以来、四日市萬古焼に百数十年伝えられ、その製法は伝統的工芸品に指定されています。

木型に布または和紙を巻き、その上に薄く延ばした土を張り付け形を作り、そして木型をばらして抜き取る手法です。



■表面装飾

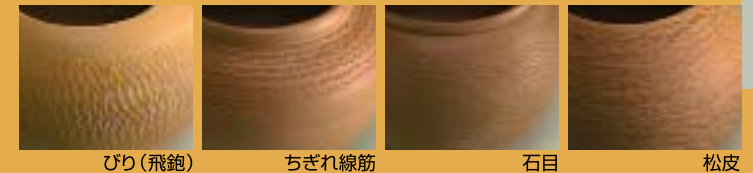
(伝統的工芸品に登録されている技法から現代まで)



●生地が乾燥してから彫り
線彫り、引き彫り、曲がり刀彫り、やすり目彫り、石目彫り、斜線透かし彫り、彫彩



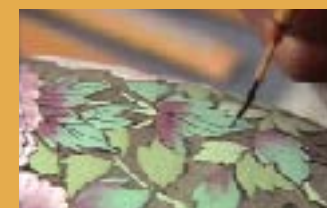
●ロクロによる装飾
びり(飛鉋)とびかんぱ・松皮・千筋・石目・ちぎり線筋・削り磨き・ロクロ目



●生地の装飾
亀甲(ダイヤカット)・張り付け・虫くい・櫛目・透かし紋・印花・化粧掛け又はどべたたき



●焼きによる装飾
還元焼成・酸化焼成・窯変・釉掛け・いぶし(黒陶)



●焼いてからの装飾
上絵(赤絵・盛絵・金彩・銀彩・プラチナ彩)・転写・ブラストによる削り紋様



急須の種類と味わい方

急須の選び方

- 急須本体と蓋を合わせてガタつきが無い「すり合わせ」がよいものを選びます。萬古焼の急須は「すり合わせ」がよく、余計な空気が入らず、お茶の香りや味を楽しめます。急須を傾けても蓋と本体の間からお茶が漏れないので、最後の一滴まで注ぐことができます。
- 急須は百面相です。多くの形・大きさ・種類・色・土の種類・産地などがあります。外国製急須もたくさん出てきていますが、萬古焼の急須を使って、職人の技による本物の良さを体験してください。

急須の茶こし網の種類

- 陶製茶こし(共茶こし)…急須と同じ土素材
- サークル網……サークル状に底に付いたステンレスメッシュ網茶こし
- カゴ網……取り外し可能な茶こし
- 丸網……丸型に付いたステンレスメッシュ網茶こし
- 平網……急須口に平らに付いたステンレスメッシュ網茶こし
- ポコ網……半球型のふくらみのある茶こし
- ベンリー網…上下に分かれて、底部に水平に網が張られた茶こし
- まるっと(帯網)…急須の内側全周にステンレスメッシュ網をめぐらした茶こし
- おーばる…急須底と茶こしに隙間が空けてあり、水切れが良い茶こし



こんな楽しみ方も〈急須をポットとして使う〉

- 萬古焼を使ってコーヒーを入れる方法
豆の焙煎に、萬古焼の焙じ器を使って白い豆を茶色に煎ります。芳ばしい香りが漂い、煎り立ての深い風味が味わえます。豆を挽いて、ハンドドリッブで急須をポットにしてお湯を注ぎ、コーヒーを抽出します。

急須でお茶を入れる魅力

お茶がうまい!	お茶本来の香りが楽しめ、より美味しくいただけます。
日本人なら	日本茶と萬古急須は日本の文化であり伝統です。
エコで経済的	1回分の茶葉で三煎まで楽しめ、茶殻は掃除や殺菌などにも利用できます。地球にやさしい飲み方です。
リラクゼーション	気分を落ち着かせ「ホッ」としたいとき、身も心も癒してくれます。
時間を楽しむ	茶葉の種類に合わせて湯の温度を変えて味わったり、茶器を楽しんだり、充実感や開放感が感じられます。
ヘルシー	お茶には多くの効用があります。(血圧降下、抗菌作用、利尿作用、ガン予防、虫歯予防、口臭予防など)
ダイエット	ノンカロリー飲料で脂肪燃焼を促進してくれます。

おいしいお茶の入れ方

※ポイントは茶葉の量と湯の温度です。

茶葉の種類	番茶・ほうじ茶	煎茶・深蒸し茶	玉露・かぶせ茶
茶碗数	5	5	3
茶量	6g	10g	10g
湯の温度	熱湯	80℃	50℃~60℃
煎出時間	30秒	煎茶:1分 深蒸し茶:30秒	2分



四日市萬古焼で入れたお茶はおいしい

萬古急須に使われる赤萬古土には、多くの鉄分が含まれています。強還元で焼成した際には素地の鉄分が変化して、萬古急須独特の紫褐色になり、紫泥急須とも呼ばれています。この素地に含まれる鉄分は、お茶の成分であるタンニンと反応し、渋味を和らげます。
また、萬古急須は“焼き締め”といって、釉薬を掛けていません。そのため、使うほどに艶と深みが出てくるのも楽しみ方のひとつです。毎日のおいしいお茶の時間とともに、使い込んだ急須を目で味わいながら急須を育ててください。

萬古焼急須でお茶を呑むとどうしておいしくなるか

緑茶の主成分は、渋味(タンニン約15%)、苦味(カフェイン2~3%)、旨味(アミノ酸類1~3%)、甘味(糖類2~4%)の他、ビタミン、ミネラル、香り成分などで構成されています。お茶は、茶葉そのものの味や香り以外に、これらを引き立たせる、
(1)急須の焼成方法、(2)急須素地の化学反応、(3)急須の形状、が相互しておいしさを作ります。

● 焼成方法

- ① 萬古焼は1200℃で還元焼成されたせつ器です。
- ② 無釉薬で焼き締めています(表面はガラス質を有していません)。
- ③ 還元焼成の間に酸化第二鉄が還元され、酸化第一鉄や四三酸化鉄となって、紫褐色を呈します。ちなみに、酸化第二鉄が酸化焼成されると朱色を呈します。

● 化学反応

- ① お茶の成分中のタンニンは、金属イオンと反応しやすい性質があり、鉄イオンと反応して水に溶けない物質に変え、おいしくなる味の要素を助けます。
- ② 湯の中の鉄分はタンニンと共に器に付着しやすい性質があり(外側に付着すると光沢が出て茶人に尊ばれる)、旨味を保つ事を助けています。
- ③ 急須で入れる茶には様々な生理作用があることが報告されています。

● 形状

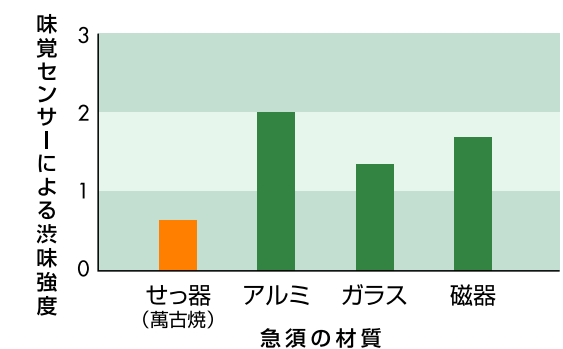
- ① 萬古急須は、大~小、筒形~平形など、形状や大きさに様々なものがあります。茶を入れる量により、茶葉と器の大小を定めます。
 - ② 香りを楽しむためには筒型の急須が良いとされています。
 - ③ 撚りの強い針状のお茶は、茶葉をよく開かせるため平型の急須が適しています。
- ※急須の口先のビニール口は輸送中の保護具ですので使用する時は外してください。

(参考文献:「日本茶のすべてがわかる本」農山漁村文化協会(2008))

日本一おいしくする急須

昔から「萬古急須は、茶がおいしく入れられる」と、多くの茶人に支持されてきました。今回、三重県工業研究所窯業研究室ではこれを科学的分析により実証しました。

● 科学的分析による試験結果



実験条件

三重県産「伊勢茶」2gと90℃の湯200mlを急須に入れ、5分間静置してお茶を抽出します。抽出したお茶を様々な分析装置で測定しました。

科学的分析結果から判明したこと

1. 旨味成分は、どの急須に入れても変化がありませんでした。
2. 渋味成分は、せつ器質の萬古急須のような焼き締め急須で低減されました。
3. 2点識別法による官能検査の結果も有意な差がありました。



食器 四日市 萬古焼

歴史

萬古焼で食の器が一般的に登場したのは、明治末期(1911年頃)に水谷寅次郎が半磁器の製造技術を開発したことにより、近代産業として発展する礎を築いた頃です。

その特徴は土味があって温かみを感じられ、大きな物の成形に適していて、磁器よりも低い温度(1180℃前後)で焼成でき、下絵付けの発色が良いことです。

翌年、大正(1912年)となったことを記念して当時は「大正焼」と呼ばれていました。

半磁器の出現により萬古焼の生産は飛躍的に伸び、四日市港からの輸出も拡大し、全国有数の陶磁器産地として育ってきました。

現在では、半磁器のオープンウェアや食器に加えて、赤土や白土による土もの食器や様々なテーブルまわりのアイテムも増え、日本全国はもちろん、海外にもその市場を広げています。

特徴

- 半磁器土、赤土、ストーンや白土など、多種の坯土があります。
- 鑄込み成形や動力成形などの様々な成形方法による多様な形状やサイズ展開があります。
- 色釉薬や下絵の具の豊富なカラーバリエーションがあり、手描きのあたたかみがあります。

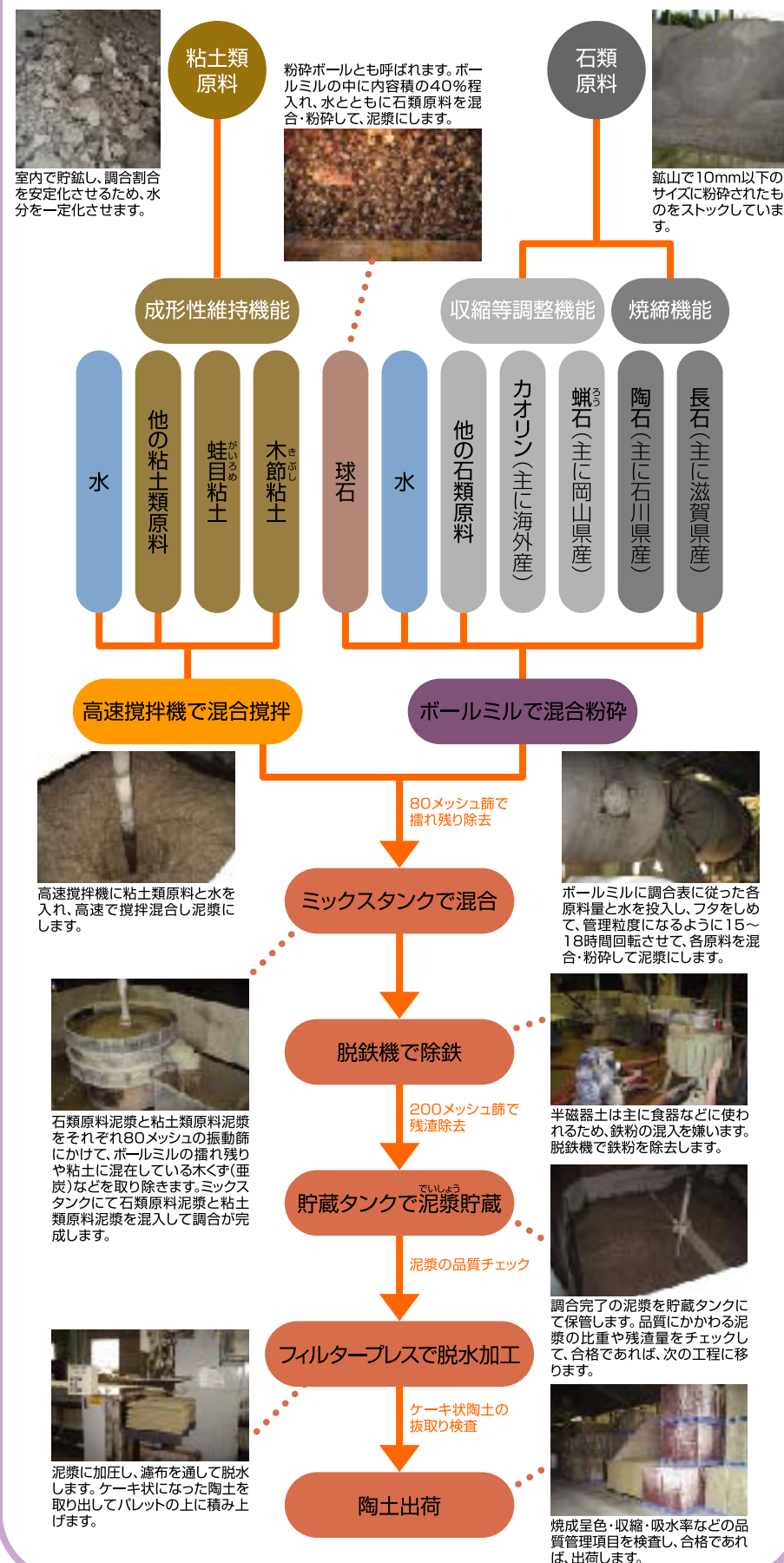
品質

グラタン皿やパイ皿などオープン対応食器はJISの耐熱食器に関する規格に適合しています。また、食品衛生法により、有害物質(鉛・カドミウム)の溶出の有無を試験して、安全性を管理しています。

使い方・注意点

- 半磁器のグラタン皿やココット、パイ皿などはオープンで使用できます。
- 家庭用の電子レンジ(600Wまで)や食器洗い機で使用できます。(金や銀、赤絵などの上絵付けがしてある食器は変色や退色する場合があります。他にも一部、使用不可の食器があります。)

半磁器陶土生産フローチャート



種類



食器の製造方法

■陶土

萬古焼の食器の多くは陶器です。陶器の中でも、半磁器土、赤土、白土、軽量土など様々な種類の坯土が使われています。半磁器土は大正時代に四日市で開発された代表的な坯土ですが、近年の土ものブームで、赤土に白化粧をしたり、白土を還元焼成したりと、バリエーションは豊富になっています。

■釉薬

萬古焼の食器の多くは、1150℃~1200℃位で焼成されます。主に使用される釉薬は、基本的には石灰釉に属します。本来、石灰釉は1200℃以上でないとい十分に溶けないため、垂鉛華やタルク(マグネサイト)、炭酸ストロンチウムやフリットを添加しています。

代表的な調合例			
釜戸長石	55-60	蛙目粘土	5-10
鼠石灰	12-15	福島珪石	10-15
垂鉛華	4-6	フリット	5-10
炭酸ストロンチウム	4-6		

■成形方法

●水ゴテ成形
板状のコテと水を用い、回転する石膏型に練土を押しつけて成形する方式。

●圧力鑄込み成形(あっさく)
石膏型の中に圧力を加えた泥漿を充填して固める方式。

●排泥鑄込み成形(ガバ鑄込み)
石膏型に泥漿を流し入れ、石膏型に必要な厚みが着肉した後に余った泥漿を流し出す方式。主に袋状の製品を成形します。

●タタラ成形
土を板状にして形を作ります。

■焼成方法

食器はシャトル窯で多品種の製品が焼成されています。半磁器土は1180℃前後で酸化焼成、赤土や白土、ストーンは1200℃前後で酸化焼成もしくは還元焼成されています。

花器



歴史

供花として始まった生け花。

掛花、花瓶など各種の花器が生産される中において一部鉄鉢水盤（現在の白丸水盤）が生産されました。この鉄鉢水盤が花器類発展の端緒を作り世界を網羅する花器に発展しました。斯くして大戦勃発までは、大正焼を基盤とした各種の花器が生産され色釉物までもと、発展していきましたが何れも戦時中に至って花器類は、贅沢品であるとの理由でやむなく中断され、一時は代用品の生産を続けました。終戦となるやいち早く花器類の生産を再開し、消費者の要望に応えるとともに特に各流派家元との協調をはかり各種の変形花器が創作されました。このとき台付水盤を洋風の果物皿からヒントを得て「コンポート」と命名したのが光山焼二代目光栖です。昭和23年のことです。

以来、戦後の復興は急速に進み、生活様式も多様化するとともに、生活にうるおいを求めての華道も盛んになり、同時に花器の分野も成長し、今日に至ります。現在、花器において国産シェアは約70%を占めています。

特徴

花器は応用範囲が広く枝もの草花のどちらにもよく、季節的にも特にこだわることはありません。コンポートは足付きの水盤形式の花器で平底の水盤と共に盛り花を生けるときに安定感があり、初心の人でも扱いやすいです。

【主な成形方法】●鑄込み成形 ●動力ロクロ成形 ●タタラ成形など



水盤

生ける

昔ながらの変わらない形愛され続ける花器。日本の文化向上と心豊かな生活に、花を生ける習慣を見直してみても…。

華ぐや

シンプルな花器は、その形ゆえに花の魅力と創造性をいっそう引き立てます。

寸胴



贈る

萬古焼は、受け継がれた伝統の技と高品質で多くの人に支持され、上質な暮らしのために欠かせない器です。佳き日の晴れやかな思いにふさわしく、高い志を持った職人たちが丹精込めてつくりました。

コンポート



楽しむ

庭に咲いた季節の花をさりげなく飾る。一輪ざしでお好みの花を窓辺に置いてみる。部屋の雰囲気や器とのバランスを考え、自分流で自由気ままにコーディネートを楽しみましょう。

変形花器



工芸

特徴

明治、大正、昭和、萬古焼を今日まで導いた名人陶工たち。その伝統技術を受け継ぐ作家には、美術展日展工芸美術入選作家、最高技術を目指す伝統工芸作家日本工芸会正会員、地元自慢の急須、手捻り、絵付け、彫刻の彫などの作家の伝統工芸士などで、それぞれに有する技術、熟練を駆使し新人の技術向上の指導など行っています。また、新しい時代の発想で萬古焼ならではの独自の技法を開発し作品づくり心血を注いでいます。工芸作家は個々に手作りで急須、器、茶道具、花瓶、花器、植木鉢、置物、オブジェなどの製作や、個展活動を行っています。また、共同作業として施設の陶壁、モニュメント、イベント展示用オブジェなどの芸術品を製作しています。



陶壁 (ばんこの里会館)

親しむ

遊び心と和のある空間に萬古焼は、日本の伝統文化に欠かせない商品です。ふと目をやると、そこには日本情緒を感じさせホッと心がなごむやきものがある。自分のお気に入りの萬古焼でリラックスしたひとときを。



巨大土鍋 (ばんこの里会館)



伝統工芸作品



モニュメント (近鉄阿倉川駅)

植木鉢

歴史

戦後の混乱から家庭生活の安定が訪れた頃、盆栽愛好者も次第に増え植木鉢の需要が高まりました。1970年代にサボテンブーム、盆栽ブームがあり、数十社のメーカーが生産していました。また、主にアメリカ、ヨーロッパへの輸出も盛んに行われていました。現在は、ホームセンター、園芸専門店などでの国内需要が主流です。

特徴

盆栽鉢・ラン鉢・観葉鉢・小品盆栽鉢・多種多様の植木鉢が作られています。冬の屋外での使用に耐えられる、よく締まる坯土で作られています。ウ泥土・赤土など色々な杯土が使われています。

【主な成形方法】●鑄込み成形 ●動力ロクロ成形など



彩る

自宅の玄関前でおしゃれに咲く花、広い庭に咲く色とりどりの季節の花、ガーデニングを趣味に持つ人にとって植木鉢へのこだわりは様々。陶器の植木鉢はプラスチック鉢などにはないあたたかみや質感、風合いがあります。園芸小物でさらに彩りを加えて自分の世界を演出してみましょう。

花器・工芸・植木鉢
その他インテリア

その他インテリア

歴史

萬古焼の発展は、ニーズにあった家庭の実用品を多く開発生産し重宝され、ヒット商品を生み出したことにあります。大正時代、大正焼は火鉢、水盤などに特性を発揮しました。戦後輸出米国向の製品も活況を呈し、玩具や置物のノベルティ製品の生産が伸張しました。

特徴

蚊取り線香を焚く「蚊やり豚」は、萬古焼を象徴する工芸品です。萬古焼は「蚊やり豚」のもっとも多い生産地です。

その他の製品／●香炉 ●照明器具陶器

【主な成形方法】●鑄込み成形 ●動力ロクロ成形など



蚊やり豚

昔懐かしい夏の風物詩、蚊やり豚。現在は、電気蚊取り機の普及で一般家庭の需要は減りましたが、インテリアとしても愛され、生活を楽しむグッズとして人気があります。昔ながらのシンプルな豚型からアレンジしたお座り豚など。ユニークなデザインが開発されています。

CHALLENGE

チャレンジ

PR活動 広める

萬古焼は、四日市の地場産業として発展し、受け継がれてきました。最近是他産地との競合の上に、外国産の安価な製品が多く見られるようになりました。

そんな中、業界では新しい技術開発やブランドづくりなど、活性化への糸口をつかもうと様々な取り組みが行われ、デザインや機能性に優れた製品を提案しています。時代の流れとともに変化するライフスタイルや価値観に対応するため、どのメーカーも大量生産から多品種少ロット生産を余儀なくされ、個性を追求したより高品質な製品づくりへと変貌してきました。

PR面では、四日市市の年間行事に加え、コンペティションの開催、ばんこの里会館では地元の人に親しまれるイベントを開催しています。広報・宣伝広告活動においては萬古焼のマスコットキャラクターを制作し、効果的に活用したり、製品には耐熱陶器を示すシール、産地を表すシールを貼り、外国製品などとの差別化をはかっています。また、やきものに関する全国規模の展示会などへの出展も積極的に参加し、ブランドイメージの向上に努めています。



萬古太鼓

四日市萬古まつり(萬古廉売市)
例年5月の第2土・日曜に開かれる廉売市が「萬古まつり」。四日市に萬古焼をもたらした先人たちの偉業をたたえる「萬古神社」の大祭に協賛して開かれる市で、萬古焼業者らが日頃のご愛顧に感謝をこめてさまざまな催しを繰り広げ、見物客を楽しませています。毎年10万人以上の人出でにぎわいますが、なぜか二日間のうちの1日は必ず雨が降る、ということです。



まり



土鍋供養祭

国産シェアの約80%を誇る、萬古焼の土鍋。使い古した土鍋に感謝する供養祭が、例年10月に開かれます。市民への感謝の意味も込め秋の萬古まつりも同時開催しています。



名古屋ドームやきものワールド出展



東京ドームテーブルウェアフェスティバル出展

イベント

やきものたまご創生塾とは?

萬古焼では、平成19年度から魅力と活力ある萬古焼業界の将来を担う製陶技術者の育成を目的として、ロクロ成形を中心とした陶磁器の製造に関する基礎的な知識と技術に関する研修「やきものたまご創生塾」を実施しています。平成22年度までに24名の研修生を迎え、約8ヶ月半の研修を経てそれぞれに萬古陶磁器工業協同組合員である陶磁器メーカーなどへ就職しました。また、新たな活力が加わるこれからの萬古焼にどうぞご期待ください!!!



人材育成



うつわ亭(ばんこの里会館内ショップ)

ばんこの里会館とは?

「ばんこの里会館」は萬古焼の歴史、技法、製品などを体系的に紹介することにより、消費者へ萬古焼を正しく理解していただくとともに、より良い製品開発を行うための産地関係者の活動拠点として、平成10年1月にオープンしました。施設には、展示スペースをはじめ、陶芸教室、ショップ、レストラン、多目的ホール、会議室などがあります。



ばんこの里会館



●10月4日は陶器の日
●10月7日は土鍋の日

施設



夏休み子ども陶芸教室

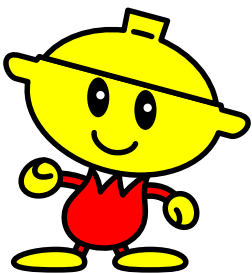
小学生の子どもたちが集まって、夏休みの一日、萬古焼の成形に取り組みます。ひよっとしたら、未来の大作家が参加しているかも。



「四日市萬古焼」は平成21年2月地域団体商標に登録されました。萬古焼は270年以上の歴史があり、土鍋は国内生産の8割を占めています。しかし、やきもの他産地と比べると知名度が低いと、もっと広く消費者に地域ブランドとしてアピールしようと萬古陶磁器振興協同組合連合会など3団体が登録申請をしました。また、これを機に産地を表すシール(左記)を商品に貼る取り組み、オリジナルポスターなどの販促ツールの活用など、ブランドPRに努めています。

ポッターくんとは?

萬古陶磁器卸商業協同組合青年部設立10周年を記念し、「四日市萬古焼」の認知度を高めるために、2001年8月に誕生しました。萬古焼の特徴のひとつである耐熱陶器土鍋を形どった顔と胴体が炎のデザインです。名前は一般公募568件の中から選ばれました。焼きものの師、陶土、陶芸家の意味を持つ英語の「POTTER」より由来。(名付け親は地元の小学5年生)



四日市萬古陶磁器コンペ

陶磁器の「新しい用途」の可能性を求めて、全国からの応募を募る陶磁器のコンペティションで、毎年開かれます。



子ども陶芸コンクール

萬古焼のより一層の普及と振興を図るため、また、未来を担う子どもたちの萬古焼に対する理解を深めるため、開催しています。「子供陶芸教室」で制作された作品を対象に審査を行い、優秀作品が選ばれます。

地域貢献



体験学習事業

地域の学校の文化教育実習として子どもたちに伝統的な地場産業である「四日市萬古焼」を理解し、体験学習してもらいます。

PR活動

Q&A

土鍋関連

Q.初めて使う時に気を付けることはありますか？
米のとぎ汁や小麦粉(大さじ1~2杯)を入れた水を弱~中火でひと煮立ちさせた後、冷めるまでそのまま放置します。その後、よく洗ってから使用してください。※詳細はP8参照

Q.土鍋の号数とサイズは？
土鍋のサイズは7号、8号、9号のように表示されています。これは、7寸、8寸、9寸と同じです。つまり、7号の場合、1寸(約3cm)×7=約21cm(土鍋本体の直径)となります。

Q.土鍋はIHで使えるの？
IH対応の土鍋であれば、お使いいただけます。
※詳細はP8参照

Q.土鍋の蓋の取っ手にはなぜ切り込みがあるの？
取っ手の切り込みは1つの他に、3つ、4つあるものも。切り込みの意味は、デザイン的な要素のほかに、成形後に取っ手をなるべく早く、そして均一に乾かすという技術的な意味があります。

Q.トンスイとレンゲって何ですか？
土鍋料理を食する際に必ず登場するのがトンスイ(=呑水)とレンゲ(=蓮華)。トンスイは料理を取り分ける取り鉢で、語源は“中国語の湯匙”の訛りとも“水を飲む(呑む)道具”とも言われています。レンゲはスプーンを口に運ぶための匙のことで、チリレンゲ(=散蓮華)とも言います。いずれも、“ハスの花弁”から形状がデザインされています。
※中国ではレンゲを意味します。

急須関連

Q.どうして萬古焼の急須でお茶を入れるとおいしいの？
※詳細はP14参照

Q.急須の内側が虹色になってきたけど大丈夫？
※詳細はP11参照

Q.急須と土瓶の違いは？
急須は同じ材質の持ち手が横に付いていて、土瓶は竹や籐など異素材の持ち手が上に付いています。一般的に、急須は玉露や煎茶などを入れるため容量が小さく(1合~2合位)、土瓶は番茶などを入れるため、容量が大きく(3合~4合位)なっています。※1合=約180cc

Q.蓋だけ、割ったのですが補充できますか？
胴体1個に蓋を1枚合わせて、焼き上げ、すり合せの工程を経て完成品となります。仮に、直径のサイズがあっても、ガタついたり、色目が合わなかったり、満足してもらえないことは少なく、結果的に、蓋のみの補充は現在ほとんど対応していません。

Q.目詰まりしたステンレス茶こしを外して洗えますか？
ステンレス茶こしは取り外すことはできても、再度同じ網をつける際、網とすき間が生じて、茶葉が湯呑に出てしまい使い物にならないことがあります。取り外して、洗うことはお勧めできませんので乾燥した後、柔らかなブラシを使い、目詰まりの原因の茶カスをとってください。

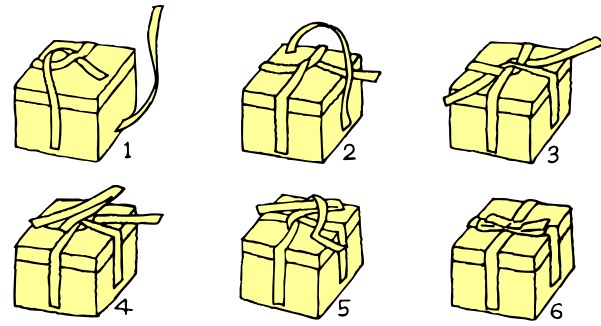
Q.使い始めに指跡の指紋がついてしまうのですが
使い始めはどうしても指紋が目立ちますが、1~2ヶ月使っていると、茶渋なども関係して表面が黒光りしてなじんできます。急須を使い込んで、光沢を出す変化を楽しんでください。

食器関連

Q.白化粧(粉引)の器を使う際に注意することはありますか？
白化粧の器の表面のガラス層(=釉薬)にはヒビ(=貫入)が入っています。そのため、油やしょうゆなどが浸み込みやすく、シミやカビ、臭いの原因になることがあります。使う前には水に浸してあらかじめ水分を含ませたり、使った後はなるべく早めに洗い、よく乾燥させてから収納してください。

その他

Q.木箱の紐の掛け方は？



Q.蚊やり豚のルーツは？
萬古焼は蚊やり豚の生産量日本一!です。蚊対策は液体状の薬品を使った電気(電池)式が主流の今、レトロでユニークな形の蚊やり豚が再び人気を集めています。さて、なぜ「豚」の形なのでしょう?そのルーツは、「野生の豚(猪)は火伏せの神様として信仰があった」、「豚は毛に覆われているので、蚊に刺されない」、「元々、野外で壺の中で草木を燻して蚊よけにしていた習慣があり、その壺を横にして豚の形にデフォルメした」...など、諸説様々です。

Q.四日市萬古焼は安全に使えますか？
※詳細はP6参照

Q.土鍋の日って何ですか？
10月7日は土鍋の日です。10月の第2土曜日には土鍋供養祭が萬古神社で執り行われます。

Q.萬古神社とは？
昭和10年、萬古商工両組合の発起で現在の地(四日市市末永町)に創立されました。御祭神には、埴安彦神、埴安姫神、火産靈神の御三柱の命及び創始者・沼波弄山翁を奉っています。その後、萬古焼業界の功労者である森有節、山中忠左衛門、堀友直などと共に萬古焼関連業者の方々も合祀しています。

Q.四日市萬古焼のマスコット「ポッターくん」とは？
※詳細はP19参照

Q.陶器と磁器の違いは？
陶器は吸水性があり、透光性がありません。磁器は白色で吸水性がなく、透光性があります。萬古焼は主に陶器の産地ですが、陶器と磁器の中間的な性質を持つ、半磁器(主に食器や花器)やせつ器(主に急須や食器)の生産も多くあります。
※詳細はP22参照

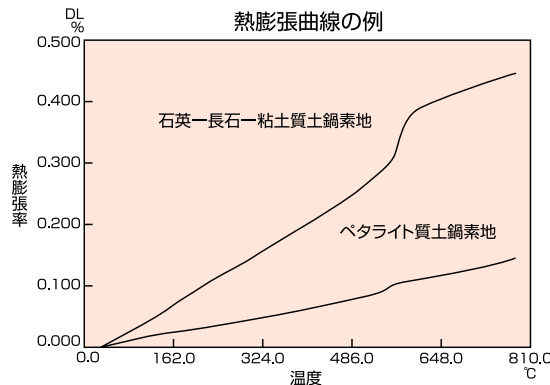
主な陶磁器分類表

分類	坯土(素地)の種類	特徴	調合割合	焼成温度(℃)	※1 吸水率(%)	※2 曲げ強度(MPa)	※3 熱膨張係数 ~600℃(1/℃)	主な産地
陶器	ベタライト質土鍋	昭和30年代に四日市で開発された坯土で、萬古焼の土鍋に使用されている。1150~1200℃で焼成することによりβ-スボジウム固溶体が形成され、低膨張性になるため耐熱衝撃性の優れた素地となる。	ベタライト(40~50%) +蛙目粘土、木節粘土(40~50%) +ろう石(10~20%)	1150 ~ 1200	8~15	20~30	1.5~3×10 ⁻⁶	萬古焼 伊賀焼
	半磁器	大正時代に四日市で開発された坯土。現在でも特白土及び並土という名前で製造、販売されている。酸化焼成のため、様々な顔料の使用が可能。焼成変形が少ないため、大物の製造が容易。また、ある程度の耐熱衝撃性があるため、オープン食器としても使用可。戦後、輸出用陶器の素材として萬古焼の中心的な役割を果たした。	木節粘土(30%) +陶石(55%) +長石(15%)	1150 ~ 1200	4~10	30~45	7~8×10 ⁻⁶	萬古焼 瀬戸焼
	粗陶器	粗粒の珪石を含む粘土質の坯土。伊賀焼の特徴的な素地で、萬古焼では和食器に使用されている。	蛙目粘土、木節粘土(100%)	1200 ~ 1260	10~20	15~25	5~6×10 ⁻⁶	萬古焼 伊賀焼 信楽焼
	軽量陶器	陶器質坯土に軽量材として中空樹脂粉末や火力発電所で発生するフライアッシュバルーン(FAB)などを添加している。高い空隙率を有するため、軽量の素地となる。萬古焼では、食器に使用されている。	粘土+長石+軽量材(中空樹脂粉末、FABなど)	1200 ~ 1250 (軽量材により異なる)	1~25 (軽量材により異なる)	20~25 (軽量材により異なる)	5~7×10 ⁻⁶	萬古焼 信楽焼
	石灰長石質陶器	四日市で低火度土という名前で製造、販売されていた。石灰石は水和膨張を抑制する効果があるため、経年貫入を起こしにくい。また、石灰石の分解による空隙が多く、軽量で、白色度が高い。萬古焼の輸出用陶器素材として使われてきた。	木節粘土(30%) +陶石(55%) +長石(5%) +石灰石(10%)	1080 ~ 1120	15~20	25~30	6~7×10 ⁻⁶	萬古焼 瀬戸焼
	白雲陶器	ノベルティ(陶磁器製置物)用に開発された坯土で、軽量である。ドロマイト(白雲石)を用いることから、この名が付いた。萬古焼の輸出用陶器素材として使われてきた。	木節粘土(25~30%) +陶石(40~55%) +ドロマイト(25~35%)	1000 ~ 1100	25~30	25~30	7~9×10 ⁻⁶	瀬戸焼
せつ器	赤萬古	四日市で製造されている急須用の坯土。強還元雰囲気焼成することにより、紫褐色(焦げ茶)色に呈色する。これを「紫泥」と呼ぶ。坯土の粒度が細かいため、焼成全収縮が大きく、17~20%になる。ちなみに常滑焼の急須は酸化焼成するため、朱色に発色する。	黄土(50%) +山土(20%) +含鉄木節(30%)	1180 ~ 1200	0	90~110	7~8×10 ⁻⁶	萬古焼 常滑焼
	ストーン	ストーンウェアとも呼ばれる。素地はよく焼き締められており、吸水率はほぼゼロで曲げ強度は一般的な磁器程度に達するが、鉄分が多く透光性がない。	せつ器粘土+長石+珪砂など	1200 ~ 1250	0~3	50~90	5~7×10 ⁻⁶	萬古焼 美濃焼 常滑焼
磁器	低火度磁器	一般の磁器よりも200℃程度低い温度で焼結する坯土。酸化焼成でも白色度が高い。平成20年3月に三重県工業研究所産業研究室が特許出願済。	カオリン(40%) +長石(40%) +ネフェリン(20%)	1100 前後	0	60~70	5.5~6×10 ⁻⁶	萬古焼
	磁器(セリサイト質)	天草陶石などのセリサイト質陶石を主原料とした坯土。焼結体にはガラス質が多いため、透光性が高い。	泉山陶石、天草陶石(90~100%) +蛙目粘土(0~10%)	1270 ~ 1320	0	80~90	6~7×10 ⁻⁶	有田焼 波佐見焼 砥部焼 九谷焼
	磁器(長石質)	美濃、瀬戸地域で製造されている長石質の坯土。有田焼などの陶石立て磁器に較べると、透光性にやや劣る傾向。	蛙目粘土、木節粘土(40%) +サバ・藻珪(60%)	1300 ~ 1350	0	70~80	5~6×10 ⁻⁶	美濃焼 瀬戸焼
アルミナ強化磁器	強度を高くするため、石英の代わりにアルミナが添加された坯土。普通磁器に較べ約3倍の強度を有するため、業務用食器、特に給食用食器として多く使われている。	蛙目粘土、木節粘土(40%) +長石(30%) +アルミナ(30%)	1250 ~ 1350	0	150~250	5~7×10 ⁻⁶	美濃焼 有田焼 波佐見焼	

※1 吸水率とは?
乾燥した焼成素地を水につけて3時間煮沸し、冷却後、素地表面の水を拭き取って重量を量り、煮沸前の重量に対する増加量を%で表したものである。小さいほど機械的強度が大きい。

※2 曲げ強度とは?
焼成した板状の素地(例えば、厚さ7mm、幅10mm、長さ80mm)を3点曲げ法により折り曲げて、そのときの最大荷重から計算して求めたもの。単位はMPa(メガパスカル)で表す。1MPa=10.2kg/cm²

※3 熱膨張係数とは?
焼成した棒状の素地(例えば、直径5mm、長さ50mm)を熱膨張測定装置を用いて加熱しながら長さの変化を調べ、例えば、室温から600℃までの長さの変化を温度変化量(600-室温)で割って求めたもの。単位は(1/℃)で表す。一般に小さいほど熱衝撃に強い。(例えば2×10⁻⁶/℃のとき、30cmの土鍋を500℃に加熱すると0.3mm伸びる。)



萬古焼のはじまり—創始者・沼波弄山

古萬古 1700年代

萬古焼の復興—森有節・千秋兄弟登場

有節萬古 1800年代

萬古焼の誕生は今から270年程前に遡ります。萬古焼は江戸時代中期の元文年間(1736~40)に桑名の豪商・沼波弄山(1718~77)が当時の桑名藩領であった伊勢国朝明郡小向村、現在の三重郡朝日町小向の名谷に窯を開いたことに始まります(小向窯)。この弄山のやきものは、作品に「萬古」あるいは「萬古不易」の印を押しするため、萬古焼とよばれるようになります。沼波弄山は享保3年に桑名の船頭町に生まれ、通称を五左衛門、諱を重長といいました。その人柄は「性廉直而能愛人(性廉直にして能く人を愛す)」と伝えられ、また、幼い頃から茶道に親しむなど教養のある人物であったことがうかがわれます。沼波弄山の萬古焼は、京焼の陶工・尾形乾山の釉薬の秘法書を乾山の弟子清吾に懇願して持ち帰ったことにより、その業が進み萬古焼一流の業として世に出たとされています。

このような経緯から、弄山が創業した萬古焼は、京焼の技術系譜を受け継ぐ地方窯の一つでありながら、創業者で、自ら茶道を嗜むなどの教養人であった沼波弄山の意向が作品の意匠(デザイン)などに反映されています。例えば、赤絵の更紗文様を地文として構成し、萬古焼独特の文様が施されているものや、当時としては珍しいライオンや象といった海外の動物、和蘭の文字といった紅毛趣味を取り入れ図案化し、異国情緒あふれる作品を生み出しました。また、製作された作品の器種は茶碗や水指、花生などの茶陶から皿類、向付、小鉢といったものまで多岐にわたり、特に盛蓋瓶や雪輪鉢といったものは代表的な作品として知られています。これらの作品は、世に好評を博し、その後、弄山は武蔵国小梅村、現在の東京都墨田区にも窯を開き、萬古焼を製作しました(小梅窯)。江戸においても萬古焼は世間の評判を得て、

十代將軍徳川家治もその製作の様子を見に来たことが伝えられています。現在では、沼波弄山以後に再興された萬古焼に対し、この時期のものを古萬古と称しています。しかしながら、小梅村に窯を開いた後の小向村で操業されていた小向窯の状況は詳しくわかっていません。沼波弄山の弟子と考えられている瑞牙という名の陶工の存在が、紀年銘を有する作品から知ることができますが、それ以外の状況は窯の場所も含めわかりませんでした。しかし、平成17年の発掘調査により、長く不明であった古萬古の時代に該当する窯跡が発見されました。その窯跡は、全長約13m、幅約4mの連房式登窯で、九つの焼成室があり、多くの陶器片や窯道具などが出土しました。

小梅窯では、沼波弄山が亡くなった後に手代の安達新兵衛が窯の経営を取り仕切っていましたが、弄山の遺児たちは製陶に興味を示さず、萬古焼は一旦廃れることになってしまいます。



古萬古窯跡

しかし、桑名の田町に生まれた森与五左衛門(初代森有節、1808~82)は、萬古焼が長らく廃れていることを惜しみ、その復興を目指して萬古焼発祥の地である小向村に弟の与平(千秋、1816~64)とともに窯を開きました。江戸時代末期の天保3年(1832)、有節24歳、千秋16歳のときでした。森有節は幼い頃から工芸的才能に恵まれ、また、好奇心の強い人物で陶器だけでなく、博物学を研究し、絵の指導を復古大和絵の画僧帆山唯念(花乃舎)に受けるなど幅広い教養人としての一面を持ち合わせていました。有節が復興した萬古焼も弄山同様、名谷山の土を作陶に用い、作品には「萬古」「有節」「萬古有節」などの印を押し、赤絵や茶陶など、古萬古の作風を踏襲しつつも独自の作風をつくりあげるに至ります。そして、森有節の作品は古萬古に対して、有節萬古とよばれるようになります。

有節萬古は、森有節自身が帆山唯念に絵の指導を受けていたこともあり、その絵付は草花の葉脈一筋に至るまで、非常に繊細で丁寧に描かれています。また、釉薬を重ねて彩色した盛絵の技法もその特色の一つにあげることができます。製作技法では、木型によって急須を成形する技術を開発します。これは、提灯を製作する際の型をヒントに考案したと伝えられ、木型によって作り出された急須は非常に薄く仕上がります。また、その木型には龍の文様が彫られているため、出来上がった急須の内面に龍の文様が現れます。有節萬古以降、三重県以外の地域、特に東日本を中心に萬古焼の製法は伝播し、「萬古」名を称する秋田萬古(秋田県)、嶋山萬古(福島県)、足利萬古(栃木県)、美濃萬古(温故焼、岐阜県)などが誕生します。これらの生産地には木型による急須の成形技法

が伝わっており、有節萬古の技術が影響を与えたと考えることができます。また、桜色に発色する腥臘脂釉は、森有節が発明したとされる釉薬で、当時としても世に称賛を博したことが伝えられています。

このように、萬古焼の復興とともに独自の作風を確立した森有節は、その業績により人々に知れ渡り、桑名藩領主より苗字帯刀を許され、国産陶器取締掛に任じられます。明治以後もパリ万国博覧会や内国勸業博覧会、京都博覧会などへ作品を出品し、活躍の幅を広げています。有節萬古には「日本有節」の印も使用されており、森有節が対外的なものを意識して作陶を行っていたことをうかがうことができます。当時来日していたイギリス人のドクトル・ドレッセルは、有節萬古の作品が雅な趣を持つ絵付を施している精巧な陶磁器としてロンドンでも高く評価されるものである、と報告しています。

このように萬古焼は、森有節によって再興されました。同時に新たな技術によって進歩を遂げ、そのため三重県内だけでなく、他の地域のやきものにも影響を与えることとなります。そして、沼波弄山から森有節と続く萬古焼の流れは四日市萬古へ受け継がれることとなります。



有節萬古窯跡(名谷B遺跡)



有節萬古窯跡出土遺物



時代	江戸時代(1613~1868)																																	明治時代(1868~1911)																																																																				
	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦	西暦	和暦																																																																				
萬古焼略年表	1600	慶長5	1603	慶長8	1612	慶長17	1615	元和元	1635	寛永12	1637	寛永14	1641	寛永18	1707	宝永4	1716	享保元	1718	享保3	1721	享保6	1722	享保7	1736~40	元文年間	1751~63	宝暦年間	1772	安永元	1777	安永6	1782	天明2	1786	天明6	1787	天明7	1808	文化5	1825	文政8	1829	文政12	1832	天保3	1833	天保4	1837	天保8	1839	天保10	1841	天保12	1853	嘉永6	1854	安政元	1856	安政3	1858	安政5	1859	安政6	1860	万延元	1866	慶応2	1867	慶応3	1868	明治元	1869	明治2	1870	明治3	1871	明治4	1872	明治5	1873	明治6	1874	明治7	1875	明治8	1876	明治9	1877	明治10	1880	明治13	1881	明治14	1885	明治18	1889	明治22	1890	明治23	1894	明治27
	萬古焼の誕生											沼波弄山が江戸へ移り、小梅村に開窯				沼波弄山が小向村に開窯				沼波弄山没する				十代將軍徳川家治台覧				森有節・千秋兄弟、小向村に開窯				山忠忠(山忠)	山中忠左衛門、阿倉川に開窯	竹川竹斎が南勢射和村(現 松阪市)内に開窯(射和萬古)	森有節、桑名藩より国産陶器取締掛に任じられる	四日市、東京間の汽船航路の開通	堀友直、四日市三ツ谷に窯を開く	山中忠左衛門、萬古焼の産地体制を確立	川村又助による萬古陶器問屋の開業	内国勸業博覧会へ出品	森有節、山中忠左衛門らが第一回	稲葉三右衛門による四日市港の整備が完成する	萬古陶器商工組合の設立	四日市、草津間の鉄道の創設	第一回帝国議会	日清戦争	四日市萬古焼の歴史																																																							
	関ヶ原の戦い											徳川家康が征夷大将軍となる				豊臣氏ほろびる				幕府ではキリスト教を禁止する				武家諸法度・禁中並公家諸法度	参勤交代の制	島原・天草一揆				鎖国の体制が固まる	新井白石の政治				享保の改革	幕府、目安箱を設ける				幕府、上げ米の制を定める	田沼意次が老中となる	天明の飢饉				寛政の改革	間宮林蔵が樺太を探検する				外国船打払令	天保の飢饉				大塩の乱	渡辺華山・高野長英らがとらえられる	天保の改革	浦賀に来る	日米和親条約	アメリカの使節ペリィ	日米修好通商条約	安政の大獄	桜田門外の変	幕府が長州を攻める	薩長同盟が成立する	大政奉還 王政復古の大号令	戊辰戦争	版籍奉還	学制公布	徴兵令	地租改正	西南戦争	日朝修好条規	民選議院設立の建白書	国会開設の請願	国会開設の勅諭	自由党の結成	大日本帝国憲法発布																							
	赤絵像唐子文小鉢											色絵草花文台鉢				見込青釉色絵窓山水小鉢				色絵龍文盛蓋瓶				色絵窓山水花鳥文大徳利				腥臘脂釉鳳凰文蓋物	色絵花鳥文大皿				木型造菊花文急須	色絵魚尽土瓶				木型造面土瓶				福助土瓶																																																												

四日市萬古の誕生—山中忠左衛門とその発展



大正焼の誕生から現代へ



文政12年(1829)に東阿倉川の唯福寺の住職・田端教正と信楽の陶工・上島庄助が海蔵庵窯を開き、信楽風のやきものを造り始めました。

四日市末永村、現在の四日市市末永町の村役であった山中忠左衛門(1821~78)は、当時人気のあった森有節の作品に興味を持ち、その斬新かつ精巧な有節萬古に魅せられ、そして、自らも作陶して有節のような優美な作品を生み出したいと考えました。嘉永6年(1853)に自ら窯を開き(山忠窯)、田端教正に教えを受けながら作陶していました。また、当時の末永村は三滝川、海蔵川にはさまれた低い土地であるため、雨期には度々水害を受け、農民が困窮するという現状がありました。そのため、村役の山中忠左衛門としては、困窮する人々に職を与え救済するという目的もありました。そして、有節萬古の陶法を模索しつつ、明治3年(1870)に量産を開始することができるようになります。

山中忠左衛門は、苦勞の末に得た陶法を一般に公開したため、これにならって開業する者が現れるようになりました。明治4年(1871)には長島藩士であった堀友直が三ツ谷、現在の四日市市三ツ谷町に陶工を集め、窯を開きます。他にも東海道付近に窯を開く者が相次ぎます。

その後、四日市萬古は産業として拡大していくこととなります。その直接的な契機は、明治8年(1875)に川村又助が萬古陶器問屋を開業したことによります。それまでは、萬古焼製品を店頭で販売していることが中心で、生産も過剰になりつつありました。しかし、四日市港が伊勢湾最良の港湾として整備され、汽船航路の開通など交通網の進展により需要も増大し、商工業の発展に大きな力を与えることとなります。このような時代の中、川村又助は横浜や神戸で海外市場の調査も行

い、萬古焼の海外輸出を目指します。その努力もあり、販路が開け、需要も拡大していくことになりました。この川村又助の輸出志向同様、堀友直も海外向けの製品の考案と製造に苦勞を重ねていました。堀友直は名古屋や横浜に支店を設け、また、横浜には窯を築き、四日市から土を運搬して萬古焼の製造を行います。

四日市の萬古焼業者も増加する中で、同業者間で不当競争などによる確執が生じます。そのため、川村又助は堀友直、森欽太郎などの有力者とともにも萬古陶器商工組合を明治18年(1885)に組織して、業界の統制を目的とする組合を設立しました。これにより、四日市萬古焼も一つの地方産業としての形態を確立することになりました。他方、需要の拡大に伴い粗製乱造を行う者もあったため、川村又助は陶工の技術奨励の目的のため、研究会を作り、組合にも品評会を設けて四日市萬古の進歩を促しました。そして、明治22年(1889)には東海道線の開通による鉄道輸送も可能となり、ますます商業的な動きも活発になっていきます。

このような状況の中、手捻りの名工「三助」とよばれる山本利助(萬里軒)、伊藤豊助(晩成堂)、小川半助(円相舎)や渡辺自然齋(蓮隠居)、岡本城峯(無眼楽)など多くの陶工が輩出され、明治期の陶芸として多くの作品が生み出されました。

四日市萬古は、それ以降も生産する企業や問屋が増え、四日市港から全国へ販路を拡大するとともに輸出産業として明治期にその基礎を築きました。

明治に入り誕生した四日市萬古は、商工業として展開されてきましたが、明治の中頃には採土地である垂坂山の白土が枯渇し、赤土を用いた茶褐色の急須生産が主流となりました。また、明治末期には不況による需要の衰退で、四日市萬古も減産を余儀なくされ、業界内では経営不振に陥っていました。その状況を打開したのが、水谷寅次郎による大正焼の誕生でした。

水谷寅次郎は、現在の桑名市長島町の農家の次男として生まれました。当初は桑名で金物店を経営していましたが、四日市市鳥居町、現在の四日市市滝川町に窯を開き、製陶家として転身します。明治の終わり頃からの萬古焼業界の窮状を打開すべく、新製品の開発に努めます。寅次郎は私財を投じて研究を続け、苦心の末、素地に硬質陶器の釉薬を施した半磁器製品を開発することに成功します。完成した翌年が、大正に改元されたため「大正焼」と命名されました。この大正焼は地肌が黄濁色をしており、磁器に比べて低火度で焼成することができるなど製造工程が平易でコストが低く、また、磁器と異なる味わいが人気を博しました。寅次郎がその技術を公開したため次々に大正焼の生産が拡がり、再び業界は活況を取り戻すこととなります。この大正焼の普及発展にともない、機械ロクロ、石膏型鑄込の技法へ転換してきた四日市萬古へ、美濃や瀬戸方面から多数の陶工が移住してくることとなります。また、石膏型の需要増大により型屋とよばれる専門業者も現れます。そして、大正末年には生産の中心が、川原町から阿倉川町に移っていくこととなります。

昭和に入ると大正焼も安定した商品となりつつあるなか、さらに山本増次郎(山庄製陶所)の硬質陶器の研究が昭和2年(1927)に

完成し、生産が始まると、萬古焼の生産量は飛躍的に伸びることになりました。また、昭和7年(1932)には、笹岡伊三郎ら(笹伊製陶所)により、軽量陶器と称する石灰質陶器が開発され、皿や大物丼類が製造されました。

大正から昭和の初年には、明治の名人陶工とは異なり、古萬古写、有節萬古写や内外の古陶磁写、展覧會用作品などを個人で作陶する独立した陶芸家が現れます。例えば大正焼の創始者水谷寅次郎(碧山)、古萬古の赤絵写が得意であった大塚齊家(香悅)、ロクロ技の人見洞永(洞永)、田中徳松(東錦堂)、岸巡男(園山)、笹岡己之吉(春山)などの陶工たちです。

第二次世界大戦では、空襲により、多くの工場、販売業者の施設が被害を受けましたが、昭和23年(1948)に貿易が再開されると、陶磁器の高い需要に対応して急速に復興しました。昭和26年(1951)頃からはトンネル窯が導入され、生産量が飛躍的に増加しました。製品の多くは、北米を中心に輸出され、昭和30年(1955)には輸出が生産額の85%を占めるまでになりました。その後、国内向けが次第に多くなりましたが、昭和60年(1985)のプラザ合意により急速な円高が進むと、輸出は急激に減少し、萬古焼は国内向け製品へと大きくシフトしました。

その間、昭和34年(1959)には、今日の萬古焼土鍋の基盤となっているベタライト質耐熱陶器の製造技術が開発されました。また、昭和54年(1979)には、「四日市萬古焼」として伝統的工芸品に指定されました。今日の萬古焼が地場産業として発展してきたのは、約270年にわたる歴史と多くの人々による努力の賜物なのです。



明治時代(1868~1911) 大正時代(1912~1926) 昭和時代(1926~1989) 平成時代(1989~)

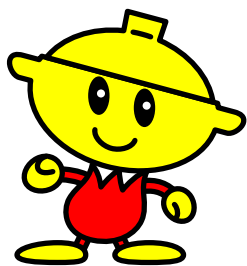
明治時代(1868~1911)	大正時代(1912~1926)	昭和時代(1926~1989)	平成時代(1989~)
1895 明治28	1912 大正元	1926 昭和元	1989 平成元
1900 明治33	1914 大正3	1927 昭和2	1994 平成6
1901 明治34	1915 大正4	1931 昭和6	1995 平成7
1902 明治35	1916 大正5	1932 昭和7	1997 平成9
1904 明治37	1918 大正7	1933 昭和8	1998 平成10
1905 明治38	1919 大正8	1934 昭和9	2002 平成14
1909 明治42	1922 大正11	1935 昭和10	2004 平成16
1911 明治44	1923 大正12	1936 昭和11	2009 平成21
川村組陶器製造場の設立	水谷寅次郎による大正焼の完成	三重県工業試験場四日市分場が開設される	四日市萬古焼が伝統的工芸品として指定される
水谷寅次郎、四日市鳥居町へ窯を開く	津市に三重県工業試験場窯業部を設置	東山金次郎による石膏型の鑄込み技法の成功	萬古の里構想により、萬古陶磁器振興協同組合連合会を設立
	機械ロクロの導入(大正7・8年頃)	川村組が硬質陶器タイルの生産を始める	三重県窯業試験場が東阿倉川788番地に新庁舎を開設
	東山金次郎による石膏型の鑄込み技法の成功	三重県工業試験場四日市分場が開設される	自動成形機の導入
	第一回萬古焼大見本市開催	山本増次郎による硬質陶器の完成	第一回萬古古廉売市開催(現・四日市萬古まつり)
	第二回萬古焼大見本市開催	萬古神社の創立	ペタライト質耐熱陶器を開発
	第三回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業組合を設立	萬古陶磁器研究会創設
	第四回萬古焼大見本市開催	工業組合法に則り、萬古陶磁器工業組合を設立	第一回萬古古廉売市開催
	第五回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器工業協同組合設立	(現・四日市萬古まつり)
	第六回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	日米安全保障条約
	第七回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	伊勢湾台風
	第八回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	日米新安全保障条約
	第九回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	国民総生産(資本主義国第二位)
	第十回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	小笠原諸島が日本に復帰する
	第十一回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	日中の国交正常化
	第十二回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	沖繩が日本に復帰する
	第十三回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	石油危機
	第十四回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	日中平和友好条約
	第十五回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	国際人権規約を批准する
	第十六回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	国連平和維持活動協力法成立
	第十七回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	政治改革関連四法成立
	第十八回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	阪神・淡路大震災
	第十九回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	アイヌ文化振興法制定
	第二十回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	自衛隊をイラクに派遣
	第二十一回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	日朝首脳会談(平壤宣言)
	第二十二回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	自衛隊をイラクに派遣
	第二十三回萬古焼大見本市開催	萬古陶磁器卸売商業協同組合設立	四日市萬古焼の歴史





萬古陶磁器振興協同組合連合会
〒510-0035 四日市市陶栄町4番8号
TEL059-330-2020

協力：三重県工業研究所 窯業研究室
朝日町歴史博物館
浅岡窯業原料株式会社
四日市市立博物館



四日市萬古焼
マスコットキャラクター
ポッターくん ©

